

2024年11月5日

2024年度海外認定研修 報告書
オーストラリア図書館研修

学習院女子大学 学習院女子大学図書館
村山 友実子

目次

1. 研修概要
2. 研修日程
3. 視察先
4. 所感・まとめ

1. 研修概要

2024年9月2日(月)～9月6日(金)に、オーストラリア最大の都市であるシドニーの大学図書館や公共図書館を視察した。図書館総合展運営委員会と丸善雄松堂株式会社の共催で行う海外研修においては、オーストラリアの訪問は今回が初めてである。

オーストラリアは歴史的にも移民や留学生を多く受け入れており、多文化共生社会の成立に力を入れている。また環境問題への取り組みにも積極的である。本研修では、そのような「オーストラリアの生活・文化・環境意識に根差した図書館の姿」¹を探る。特に大学図書館では、「留学生をはじめ、先住民、LGBTQIA+コミュニティ、障がい者を含めた多様な利用者へ向けたサービス」²に重点を置く。

なお参加者は、私立大学図書館職員3名と関連企業社員1名の計4名であった。

¹ 丸善雄松堂「オーストラリア図書館研修2024」丸善雄松堂コーポレートサイト,
<http://yushodo.maruzen.co.jp/event/202409020906/> (最終閲覧日:2024-05-16)

² 同上

2. 研修日程

日付	予定
9/2	出発
9/3	シドニー到着 ■ ニューサウスウェールズ州立図書館 ■ ニューサウスウェールズ州立美術館 ■ (カスタムズハウス) ※見学のみ
9/4	■ シドニー工科大学図書館 ■ シドニー大学図書館
9/5	■ 国際交流基金シドニー日本文化センター ■ グリーンスクエア・ライブラリー
9/6	帰国

3. 視察先

1) ニューサウスウェールズ州立図書館(State Library of New South Wales)³

1826年に創立されたニューサウスウェールズ州最古の図書館。地下で繋がった歴史ある旧館(The Mitchell Wing)とモダンな新館(The Macquarie Street Wing)で構成されている。所蔵品は書籍、地図、写真、絵画、デジタルコンテンツなど多種多様で、累計600万点を超える。レファレンスライブラリーであり、貸出サービスは行っていない。近年は、誰もが歓迎され平等にアクセスできる図書館を目指している。

旧館は、荘厳な雰囲気 Mitchell Library Reading Room や会員用ラウンジ、キュレーターが管理するギャラリー、地図室などを備えている。愛好家の協力で設立された Shakespeare Room には17世紀に出版された作品集(初版)を始め、5,000点以上の関連コレクションがある。

新館は旧館よりカジュアルな雰囲気、家系図作成のような特殊レファレンスコーナー、館内PCを設置したワークスペース、カフェ・ショップなどがある。またファミリー層の利用を増やすため、子ども向けのスペースを増設した。

またデジタル関係の取り組みについては、既存資料のデジタル化、ITサービス(機器・オンラインサービス)の整備、webサイトや検索エンジンの整備、個人情報などのデータ管理の4本柱を掲げている。資料のデジタル化は、長期保存や遠隔利用、原本の保護を目的に、10年がかりのプロジェクトを実行している。また検索エンジンについては、元々資料種別ごとに別々の検索システムがあり、一般利用者には使いづらかったため、横断検索できるように独自

³ State Library of New South Wales, <https://www.sl.nsw.gov.au/> (最終閲覧日：2024-11-05)

に整備した。ホームページにコレクションのページを作って各資料種別の検索システムをリンクし、利用者が自然に目的のコンテンツに分岐できるようにするなど、工夫している。

AI は画像に検索タグを付与するために使用したが、対話式の AI の導入については今後の課題である。使うならば、利用者に合わせて言葉遣いを変えられるような形を希望しているとのこと。

2) ニューサウスウェールズ州立美術館(The Art Gallery of New South Wales)⁴

図書館は美術館南側の旧館地下 3 階にあり、一般的な図書室・アーカイブ(the Edmund and Joanna Capon Research Library)と児童図書館(The Ashley Dawson-Damer Children's Art Library)の 2 種類のエリアを有している。資料は書籍 10 万冊以上、定期刊行物 1,400 タイトル以上と膨大で、オーストラリアの芸術に関する研究ファイルは 100 万点を超える。

ギャラリー設立時(1871 年)のキュレーターの調査用図書室に端を発しているため、美術作品の解説書を中心とする成人向けのレファレンスライブラリーであったが、改装を機に家族連れ向けの児童書エリアが新設された。小部屋で「こそこそ」と読めるようにデザインされた「cubby houses」や床にクッションを敷いたスペース、ユニークな形のソファ席を作り、大人も子どももリラックスして楽しめるデザインとなっている。絵本は、アボリジニの作品を使ったものや障がい児向けの本など、幅広く、なるべく多言語で収集している。

職員が常駐しているカウンターの奥に一般の図書室・アーカイブがある。資料の開架を重視しており、原則オンライン化した資料のみ近隣の外部書庫に置いている。さらに奥には、予約制の個室やカジュアルな閲覧スペース、職員用の作業室や閉架書庫がある。館内 PC が 2 台あり、端末限定のアーカイブ資料を視聴できる。

資料の多様性には配慮しており、約 5 冊に 1 冊が英語以外の言語の資料である他、主題作品の生産地を幅広く選び、二か国語の資料やクィアのアーティストに関係する資料を意識して増やしているとのこと。ただし電子書籍は、視聴端末により元の画像と色が変わって見えるため購入しない方針で、現在の蔵書は自館で作成した 1 冊のみとのこと。

資料のデジタル化については、予算不足のため思うようには進んでおらず、フィルムなど劣化しやすい資料を優先して進めている。

3) シドニー工科大学図書館(UTS Library)⁵

シドニー工科大学は 1988 年設立の比較的新しい総合大学で、2023 年の学生数は 47,913

⁴ Art Gallery of NSW “Library, archive and children’s art library”,

<https://www.artgallery.nsw.gov.au/learn/library/> (最終閲覧日：2024-11-05)

⁵ UTS Library “Homepage” <https://www.lib.uts.edu.au/> (最終閲覧日：2024-11-05)

人(うち留学生は 13,065 人)になる。⁶

近年キャンパス全体のリニューアルに際して UTS Central(UTS セントラル)が建設され、その中に図書館が入っている。図書館は 4 階の Student Learning Hub(学習相談とイベント・リフレッシュスペースを兼ねている)、5-6 階の Reading Room、7-9 階の Library で構成されている。静かに学習するエリア、リラックスして会話ができるエリア、Hearing assistance を各部屋に搭載したミーティングルーム、博士課程向けの予約制の研究室(Scholars Center)など利用形態に応じた様々な学習スペースがある。ビル全体がガラス張りで明るく開放的な空間となっており、3 か所あるバルコニーにはソーラーパネルが設置されている。デザインと環境性能の両面で高評価を受けており、新築・改装した図書館を対象に行われるオーストラリア図書館デザイン賞(Australian Library Design Award)では、2021 年に学術図書館(Academic Libraries)部門最優秀賞を受賞。建築物の設計仕様等に基づく環境性能の認証制度である、オーストラリアグリーンビルディング協会のグリーンスター認証 5 つ星を獲得している。

電子資料に力を入れているのも特徴で、基本は電子書籍での購入を優先し、現在の蔵書構成は、3分の2が電子書籍である。近年の価格高騰により、業者との価格交渉や契約の整理、学内における予算交渉の必要に迫られている。図書館の各学部担当者を通して教員に交渉の場に立ち会ってもらったり、オーストラリア・ニュージーランドの大学図書館組織 CAUL や同系統の学部を持つ大学などでまとまって交渉をしたりすることもあるとのこと。

論文掲載料(APC)については、図書館と各学部のリサーチオフィスが業務を分担することで合意が取れている。オーストラリア全体では対応が追いつかない大学が多く、図書館で全てを請け負っているところがほとんどとのこと。UTS では研究成果のオープンアクセス化についても図書館と学部で業務分担する方針である。

利用者教育については、新入生オリエンテーションや授業での文献調査ガイダンスを行っている。ここ 2 年は学生同士で教え合うスタディグループという取り組みを行っていたが、今後は学科に任せ、個別相談の対応に注力する予定。また「スタディガイド」という文献調査やレポート作成に関する学習コンテンツを作成し、Web サイトに掲載するだけでなく、授業資料として各学生にオンラインで配布している。インスタグラムや Tiktok のショート動画も活用している。

多様性への配慮に関する取り組みとしては、アボリジニの人々に対する教育機会の充実が求められる状況の中、職員側が彼らのタブーやマナー違反に抵触しないよう、ルーツを持つ職員が担当する職員向け研修が行われている。また障がいのある学生には個人の事情に合わせて大学全体で支援を行う。特に経済的に困窮する学生のため、ノートパソコンや充電器の貸出機が設置されており、館外貸出も行っている。今後カメラなどのハイテク機器の貸出も

⁶ University of Technology Sydney “Facts, figures and rankings”

<https://www.uts.edu.au/about/university/facts-figures-and-rankings> (最終閲覧日：2024-11-05)

開始するとのこと。

大学全体で AI への対応を検討しているが、全面許容から全面禁止まで教員ごとに意見が分かれている。図書館では対話式 AI を「スタディガイド」で使用している。一度、架空の文献を提示してしまう回答が作成されて問題になったことがあるが、最近では支障なく運用されているとのこと。学生には AI の回答が正しいのか判断する力が必要になっていると伝えている。

4) シドニー大学図書館(University of Sydney Library)⁷

1851 年創立のシドニー大学は、オーストラリア最古の名門総合大学である。フィッシャーライブラリー(Fisher Library)を中心に 6 つの図書館と附属施設を備えた、南半球最大の学術図書館を有している。500 万冊近い蔵書の内訳は電子書籍が 270 万、貴重書を含む図書が 190 万冊。現在は基本的に電子書籍を購入している。

フィッシャーライブラリーには、研究者用のラウンジやミーティングルームの他、様々なニーズに対応した設備がある。子どもがいる学生向けのペアレンツルーム・授乳室の他、キッチン、仮眠用ポッドなどがあつた。さらに時代に応じて元のデザインを残しつつ柔軟に変化しており、かつて CD やレコードを聴くために使われた部屋は、その防音性を活かして Podcast 配信用の部屋にリメイクされている。学内に 2 か所ある Think Space も図書館の管轄である。技術ラボのような施設で、レーザーカッターや 3D プリンター、ミシン、レコーディングブース、自習用の個室があり、学生が自由に使える。材料も全て無料で提供されている。

「多様性」を意識したサービスも特徴である。留学生向けには、交流の機会の提供や多言語対応の図書館用語リストを用意している。LGBTQIA+コミュニティの支援にも大学全体で取り組んでおり⁸、図書館では関連するアート作品を飾り、ジェンダーフリートイレの設置をするなど、支援していることを目に見える形にしている。また障がいを持つ学生には、必ず入学時に支援サービスの説明を行い、支援機器を集めた部屋も用意している。そして、複数館にアボリジニの方が優先して使用できるスペースがある。ルーツを持つ人は、この部屋を予約してイベントに使用することもできる。さらに経済的に困窮している人向けに、全館でクロワッサンなどの簡単な朝食を無償で提供している。このプロジェクトは、友達作りやメンタルヘルス支援に繋げるきっかけとしても重視されている。

利用者教育としては、館内の窓口での個別相談を受け付けている他、新入生向けの電子リソース講座や様々な授業と連携した図書館の資料と設備を活用する課題を提供している。また館内にある Student Hub では、アカデミックライティングや数学、IT 関係などの分野に特化して相談ができる。これは他部署の管轄場所であり、人が集まるので図書館に出張している

⁷ University of Sydney “Library home” <https://www.library.sydney.edu.au/home> (最終閲覧日：2024-11-05)

⁸ University of Sydney “LGBTIQ+ community” <https://www.sydney.edu.au/about-us/vision-and-values/diversity/lgbtiq-community.html> (最終閲覧日：2024-11-05)

とのこと。

また院生による学習サポートグループが、学部生から学習面や学生生活に関する様々な相談を受けている。彼らはイベントスタッフや Think Space のアシスタントなど、多方面で活動している。

AI については、一部データベースでの検索に取り入れられているものの、独自のコンテンツは準備中である。最新のツールの使用法を調べられるチャット形式の Q&A フォームや、学科別の文献調査を補助する AI を構想しているとのこと。

5) 国際交流基金シドニー日本文化センター図書館(The Japan Foundation Library)⁹

独立行政法人国際交流基金(JF:The Japan Foundation)は「世界の全地域において、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関」¹⁰である。海外での日本語教育の普及に携わっており、世界 25 か所に支部がある。「文化」「言語」「対話」の 3 柱を掲げており、それぞれ、芸術作品の展示や館内外のイベント、日本語教育、日本に関する研究の助成が主たる活動である。

シドニーセンターは Central Park Mall という商業施設の 4 階にあり、教室 3 部屋と図書館、多目的スペース、ギャラリー、事務室がある。図書館は誰でも来館利用が可能だが、オーストラリア在住者は利用登録により貸出が可能となる。現在の登録者は無料会員 808 名、有料会員 440 名。職員は館外に出向中の 1 名を含めて 25 名。外部委託は一切しておらず、貸出・返却を受付担当者が兼任する以外は、司書 1 名で図書館業務を全て担当している。

蔵書は約 2 万点。日本語学習用のテキスト、指導用参考書、音楽 CD、日本に関する研究書、オーストラリアで販売された日本映画やアニメの DVD など多様である。漫画は英訳版も収集している。特に日本文化に触れている作品を優先して購入しているとのこと。逆に授業用の教材は少ない。代わりに独自制作コンテンツをホームページにアップロードしている。電子書籍は Kino Den を導入し、187 タイトルほどを購入している。

日本語学習者向けの支援として、学習コンテンツの提供や講座の開催、教師向けの研修なども行っている。高等教育レベルの機関からの要望で、日本の新聞データベースなどの検索講座を出張で行ったり、図書館イベントで学生を受け入れたりもしている。

また邦人の子どもを対象とする日本語教育の一環で、2018 年 5 月から低学年くらいまでを対象とする日本語読み聞かせ会を始めた。現在季節行事をテーマに年 7 回開催している。大体 60 分 1 回で、読み聞かせだけの時もあるが、半分はお話し・歌・手遊びをして、残りは工作をすることもある。

⁹ Japan Foundation, Sydney “Library”<https://sydney.jpf.go.jp/library/> (最終閲覧日：2024-11-05)

¹⁰ 国際交流基金「国際交流基金について」<https://www.jpf.go.jp/j/about/> (最終閲覧日：2024-11-05)

6) グリーンスクエア・ライブラリー(Green Square Library)¹¹

グリーンスクエア駅前の広場に 2018 年に開館した公共図書館。2041 年に完遂を目指す都市再編計画の 1 つとして建てられた最初の公共施設である。三角形のガラス張りの建物と 6 階建てのタワーで構成されており、地下で繋がっている。建築デザインはコンペティションを開催して決められ、コーディネートには住民の意見が反映されている。2021 年にオーストラリア図書館デザイン賞 (Australian Library Design Award) の公共図書館 (Public Libraries) 部門で入賞、グリーンスター認証も 5 つ星を獲得している。

ガラス張りの建物にはカフェが入っている。タワーには「レインボーウォール」¹²がある静かな部屋、ハイテク機器を備えた部屋、ピアノもある防音室など様々な部屋がある。閲覧室と子ども向けのコーナーは、スペースを確保するため地下階にある。ここには、ミーティング用の部屋も 2 部屋ある。一部の書架は可動式で、オープンスペースを作ったり、天井から巨大スクリーンを下せたりと、イベントの開催も考えた設備となっている。また宣誓供述書 (Affidavit / Statutory Declaration) を作成するカウンターがある。グリーンスクエア・ライブラリーでは、毎週水曜日に窓口を開いている。これはオーストラリアの公共図書館では一般的なサービスとのこと。¹³事前の調査で明るく開放的な空間が求められていることがわかっていたので、43 個の円形の天窗を付けて、窓が少ない点をカバーしている。

障がい者向けサービスとしては、利用を支援する資料・機器の用意の他、郵送貸出や施設貸出、home library (利用者の希望を聞いて職員が選んだ資料を箱貸しする) などを行っている。留学中の大学生が来館することもあり、特に中国人が多いため、中国語の資料を中心に多言語の資料を用意しているとのこと。世代を問わず多様な人々に情報を提供することを使命と考えており、図書館外の組織との連携も重視している。

4. 所感・まとめ

本報告書は私立大学図書館協会の海外認定研修の報告であるため、主に大学図書館について述べる。特に気になった観点は次の 6 点である。

まず、確実に電子書籍の普及度が日本を超えていた。UTS の職員の方によると、オーストラ

¹¹ City of Sydney “Green Square Library”

<https://www.cityofsydney.nsw.gov.au/libraries/green-square-library> (最終閲覧日：2024-11-05)

¹² 末尾「付録：視察先の写真」を参照のこと。 ※12月9日加筆

¹³ 宣誓供述書の作成には Justices of the peace という特定国家資格保有者の立会いとサインが必要。詳しくは次のページを参照。Communities and Justice “Justices of the peace”

<https://dcj.nsw.gov.au/legal-and-justice/legal-assistance-and-representation/justice-of-the-peace.html> (最終閲覧日：2024-11-05)

リアでは 10 年ほど前からタブレットとともに電子書籍が普及し、最近では Audible などのオーディオブックも利用者が増えているとのこと。しかし電子ジャーナルやデータベースの価格高騰や APC・OA への対応、AI の活用など、課題として上げている内容は日本と共通するところが多い印象だった。

2 点目に利用者教育のオンライン化が顕著だった。背景に留学生の事情が絡んでいそう。14 留学生の学費は通常の 3・4 倍あり、大学の収入源の一つであったため、最近政府が留学生の入学上限を設定するほど受け入れも盛んだったようだ。しかもオンライン留学も多く、シドニー大学では留学生の半分は国外から受講しているとのこと。そのせいか、国全体でオンライン授業が多い傾向にあり、履修登録や授業資料の配布、課題提出などがオンラインで完結することが一般化しているようだ。オンライン化は必然と言えよう。また必ず授業と連携した取り組みがあり、図書館と教員の連携の重要性は国を問わないと感じた。

3 点目は「多様性」。「3. 視察先」で述べたように、アボリジニ、留学生、LGBTQIA+ といった、様々な観点での「多様性」に配慮したサービスが各館で工夫されていた。また視察先の多くが、元々アボリジニの人々が所有していた土地として認定されている場所にある。ホームページには、彼らに敬意を表し、土地を借用させてもらうことに感謝を述べる文章が必ず記載されている。またシドニー大学では、職員の方がプレゼンの前に手を胸に当てて宣誓をしていた。現地の方からも伺ったが、支援の姿勢を「目に見える」形にするということをととても意識しているように感じた。

4 点目は、日本に比べて大学図書館の使い方が自由な印象だった。この背景には「多様性」への意識と、学内の居場所としての図書館という意識があると思う。

前者については、UTS の職員の方が「利用者自身がモラルを持ち、自ら考えながら使って欲しいと思っている。自由度の差は各大学で異なるものの、様々なルーツの人がいるため、多様性に配慮し、なるべく規則で縛らないようにしている。」と話していた。

¹⁴ この点については、オーストラリアは元々国内で遠隔教育が発展していたと、原稿提出以降に情報提供を受けた。それを受けて参照した文献には、次の通り記載がある。

「オーストラリアでは、その国土の広大さから遠隔教育が不可欠であった」（片岡 昇，久保田，賢一「高等教育における遠隔教育の概要とその実践：歴史的視点と事例研究を題材として」『情報研究：関西大学総合情報学部紀要』15， p.43, 2001 年。機関リポジトリで公開あり

<https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/records/10848>）。

「オーストラリアは、国土が広く都市部が点在していること、また社会人学生の比率が大変高いことから、遠隔教育に関する取組がどの大学でも積極的に行われている」（放送大学学園「【調査項目 3】諸外国における遠隔教育の質保証」『平成 21 年度・22 年度文部科学省先導的・大学改革推進委託事業「ICT 活用教育の推進に関する調査研究」委託業務成果報告書』p. 78, 2011 年。文部科学省ホームページより閲覧可能

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1307264.htm）。

※2024 年 11 月 28 日加筆。

続いて後者だが、入館者数が日本ほど重視されていない印象を受けた。両大学も図書館入口にはゲートがあるが、日本の大学で一般的な入退館システムとしては機能していない。ドアの上部などに設置されたセンサーで利用者を検知してカウントするのが一般的なようだ。資料の電子化が進んでいるために来館利用の優先度が低いのかとも思ったが、恐らく来館利用については、利用者の交流や課題解決の方に焦点が当たっているからではないかと考えられる。シドニー大学では、利用者支援について「大学で満足のいく成果を出せるように、生活が良くなるように、友達との出会いの場になるように」という目的を掲げていた。また両大学とも資料の多くを地下書庫や外部書庫に移動し、空いた空間を学生の利用スペースに充てているのも、その表れではないだろうか。

次に5点目。両大学とも、選書候補リスト作成や外部書庫管理などの業務委託、自動返却機の導入など、アウトソーシングや機械化をしており、職員の業務効率化を意識しているように感じた。

最後に、大抵の図書館で、デザインの中にアートが組み込まれていたり、所蔵品やアート作品を飾っていたりした。たとえば UTS では定期的にアート作品を館内に入れているとのことで、たとえば5階には地元アーティストの作品があり、7階の図書館入口にも Book Witch というアート¹⁵を設置していた。シドニー大学でもアート作品を積極的に飾っているとのことで、こちらは通路の一部が展示コーナーになっていたり、複数のエリアで移設当時の写真が壁にかかっていたりしたことが印象に残っている。またアボリジニの文化への敬意や LGBTQIA+支援などの明確なメッセージ性を持って作品を選んでいる事例も多かった。さらに UTS とグリーンスクエア・ライブラリーでは廃棄予定の資料をリメイクして館内装飾に転用しており、環境問題も意識されているように感じた。

¹⁵ UTS Library “2022 Katy B Plummer” <https://www.lib.uts.edu.au/whats-on/exhibitions/2022-katy-b-plummer> (最終閲覧日：2024-11-28) ※11月29日加筆

付録:視察先の写真

全て研修中に筆者が撮影。

1) ニューサウスウェールズ州立図書館



旧館の外観

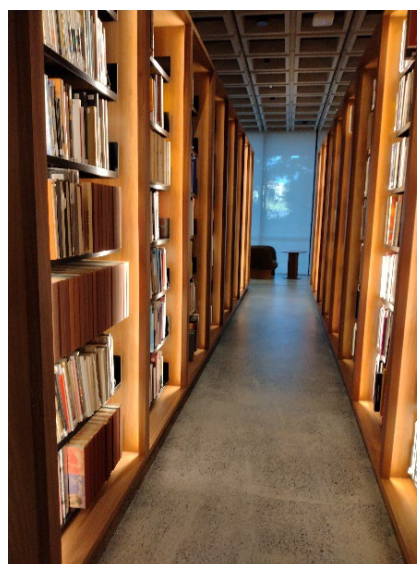


Mitchell Library Reading Room

2) ニューサウスウェールズ州立美術館

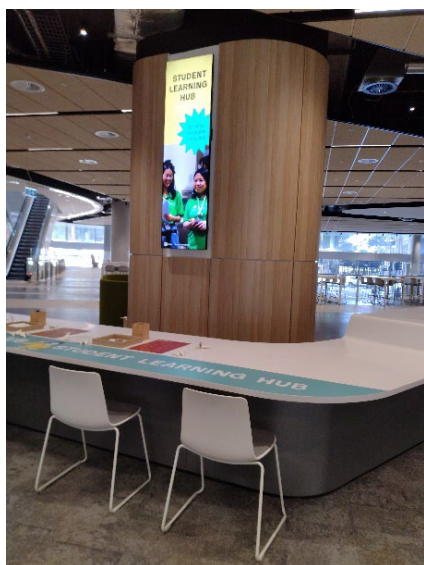


cubby houses



高級木材が使用された書架

3) シドニー工科大学図書館



Student Learning Hub



5階 Reading Room

4) シドニー大学図書館

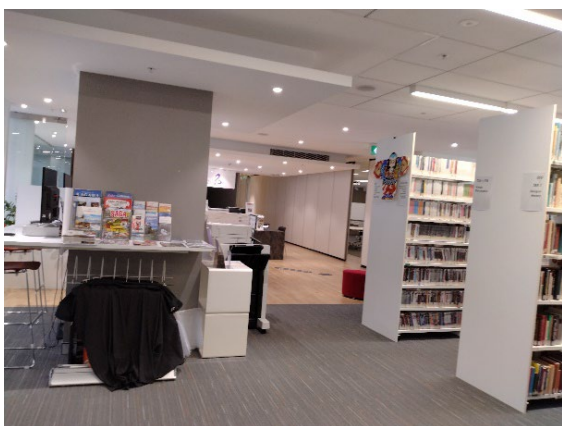


リメイクされた Podcast 配信部屋



ThinkSpace にある 3D プリンター

5) 国際交流基金シドニー日本文化センター



図書館内観



書架

6) グリーンスクエア・ライブラリー



外観



除籍本を活用したレインボーウォール